

人は人によって救われる

〈25年間の震災ボランティア活動から

牧^{まき}

秀^{しゅう}

一^{いち}



プロフィール

一九五〇年大阪市生まれ。一九七五年神戸市で高校教員となる。夜間高校一筋で、三十七年間の教員生活を終える。一九九五年阪神大震災直後、「よろず相談室」を避難所で開設。避難所閉鎖後も仮設住宅、復興住宅に移った高齢者、震災障害者の見守り活動を続けてきた。

○司会 たいだいまより二〇二〇年度講座「生きること」の第四回目を開催いたします。

本日はお忙しい中、ご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

それでは、本日お招きしました講師、牧秀一さんのプロフィールをご紹介します。

牧秀一さんは、一九七五年から定時制高校の教師として勤務されていましたが、一九九五年の阪神・淡路大震災で神戸市の自宅で被災されました。牧さんは、避難所となった近くの小学校で「よろず相談室」を設立され、ボランティアとして被災された方への支援活動を始められ、その後二十五年にわたり、被災者の家を訪ね、生活に関する困り事などを聞き取り、そつと寄り添い、ともに歩んでこられました。

それでは、牧さんにご講演いただきます。皆さん、拍手でお迎えをお願いいたします。(拍手)

○牧秀一 皆さん、こんにちは。本題に入る前に、大学生の頃のことを少しお話ししたいと思えます。僕は学校のことを、実は何もかも知ってた大学生じゃなくて、定時制高校の存在を知らない大学生だったんです。テニスをしていましたので、テニスを教えるにこうということ、東京の大学だったんですが、そこから神戸市を受験して、そして合格した。もちろん頭の中に定時制高校の存在すら知らない大学生だったもんで、全日制高校に勤務するだろうと。昼に勉強して、夕方から部活動というような考えでしかなかったんです。校長が「君はこつちや」ということで、連れて行かれたのが定時制高校だったんです。「定時制って何です？」って聞いたときに、

校長が「おまえは知らんのか！」と、えらい怒られたのを覚えています。もう四十年以上も前の一九七五年ですけれども、着任式では、二百名ぐらいの生徒がいて、中には金髪でピアスして、はすに構えて迎え入れてくれた生徒もいました。僕は体育系でしたから、こいつらに負けたらあかんわと思って、着任式の挨拶は一言、「おまえらに負けへんぞ」って言うて帰った。それで終わったんです。

それで、その子たちの中には、暴走族もいましたし、それから貧困な家庭の子もいました。不登校の子もあのととき若干いました。今は本当に不登校の子が多いです。障害を持った子もいました。そういうさまざまな子の背景とか、気持ちに触れたのは初めてなんです。そこで僕は数学を教えましたけど、彼らに人生を教えられました。その子たちや、それから親との家庭訪問を繰り返したので、家庭訪問で親の生きざまに教えられました。だんだん、だんだんはまっつって行って、やめられへんようになった。校長は、六年目ぐらいから「おまえ、はよ全日制行け」と。「どこ行きたいんや」とか言うてましたけど、「行きたいねん」とか言うて、もうずっと断り続けてたんです。

神戸市には、「希望と承諾の原則」というのがあって、希望じゃないところには行かなくていいんです。だからずっと断って、だから毎年、校長から、教育委員会から、厳しく言われてくるわけですけれども、一回だけしようがないかなと思ったのは、子どもが幼稚園に入ったときに、一緒に晩御飯が食べられへん。僕は昼から家を出ますし、帰ってくるのが十二時過ぎますから、

一緒に御飯が食べられへん。妻に、「子どもと一緒に御飯を食べてやってほしい」と言われたときは揺れました。仕方がないから全日制高校に行こうと思って、希望したんですよ。そうしたら即返事が返ってきて、言われた学校は、家から二百メートルの学校やったんです。嫁が反対しました。なぜ反対したかというのと、「絶対あんたは、毎日学生を家に連れてくる。『牧先』の子や言うて、うちの子をいじめるに決まってるから、その学校はやめてくれ」と言うので、その学校も辞退して、また別の年に、定時制高校をもう一回希望しました。だから三十七年間の教員生活で、しんどかったですけれども、本当にいろいろなことを教えられました。教えられたことで、阪神大震災のとき、すつとボランティア活動に入れたんかなと思います。もし全日制高校の教師であれば、恐らくやってなかった。テニスばかりしとったん違うかな思います。そんなんで、もともとがボランティアをやるうなんていう人間ではありませんので、そういう目線で聞いてください。

今からちょっと見ていただく映像があるのですが、震災に遭った高齢者とか、ひとり暮らしの人たち、病弱な人たちの訪問活動をしてたんです。活動をする中で、どんな人が亡くなっている。この人たちから書き留めるべき言葉をいっぱい僕は教えられたんです。でも学校教師をやりながら、空いた時間の活動ですから、それがなかなかできなかったんです。それで、どうしようどうしようというときに、ちょうど広島島の原爆資料館を思い出し出したんです。原爆資料館の中にテレビがあって、原爆投下時の体験を語ってる映像があったんです。それをふと思い出して、心安

くしている人たちに声をかけて、固定カメラで僕と話をしている状況をずっと撮ろうと決めたんですが、震災から二十年経ってからです。去年まで、五年間かけて二十二世帯の人たちの話を聞きましました。それは震災のときだけじゃなくて、震災の前の生活とか、それからその後、自分は後ろ向きになっていったのか、前向きになっていったのか、そして今どう考えてるのかというのをずっと、できるだけ人生丸ごと聞こうと思って聞きました。ですから、二十二世帯の人たちの話を聞いて、その合計四十時間はよろず相談室の宝物で、最初は社会に出すものではないと思ってたんです。

ところが、カメラマンがこれを見て、「これは僕たちでは撮れない。長いつき合いの中でしか生まれない会話だから、こういうのは撮れない」。テレビ局とかは、やっぱりシーンを撮りたいわけです。そうじゃなくて、これは普通の会話なんです。「僕たちには、こんなのは撮れないので、社会に出すべきですよ」と言われたんです。それでちょっと心が揺れたんです。最初は出さないという約束でしたので、社会に出すということは良くないんだけど、その映ってる人たち一人一人に話をして、「構へんかな」と聞いたら、「ええで」って言ってくれました。二十二世帯ですけど、十五世帯です。あとの七世帯の人たちは亡くなったり、ちょっとこの人はしんどいだろうなどと思う人たちは声をかけませんでした。実は四十時間を六時間に編集したんです。この編集作業にはたくさん人の協力がありました。誰が協力してくれたかというところ、マスコミなんです。競争相手やのに、みんな一緒の方向に向いて、もうNHKだろうが、地方紙だろうが、地方局だ

ろうが関係なしに、十何人いたんですけども、みんながこの気持ちになってつくつくしてくれ、六時間に編集しました。これも大変やったんですけどできたんです。約五十分のダイジェスト版もあるんです。これが実は「地方の時代」という映像祭があるんですけども、十一月十四日に、関西大学の会場で優秀賞をもらいました。来月十二月の十五日ぐらいには本屋に並ぶと思うんですけども、証言集を出版します。その中にこのダイジェスト版のDVDを差し込んで、販売する予定です。たくさんの人が協力してくれました。例えば作家の高村薫さんがおられますけども、彼女も結構長い文章を書いてくれました。本の中に挟んでます。NHKの大越キャスターは、つい最近までスポーツニュースとか、その前はニュースウオッチ9のキャスターをしてたんですけども、彼も書きますと言って、コラムを寄せてくれました。多くのマスコミの人間とか、ずっとかかわってた人たちがコラムを書いてくれました。また、よろず相談室のメンバー、仲間たちもコラムを書いてくれた。いろんな人の文章が集まって、出来上がった本です。「希望を握りしめて」という題で出版します。

それで、この六時間のダイジェスト版にも最初に出てくるんですけども、それをちょっと流しますので、見てください。今年です。

(映像)

・息子三人いるんですけども、そのうち二人が亡くなりました。一歳と二歳の子が生き埋めになって、焼死です。

・この人は、この後一週間後に亡くなりました。

・二か月で、ベビーベッドの赤ちゃんの上に、一番重たいたんすが倒れてきて、その子だけが障害者となったんです。今も苦しんでいます。

・十八時間生き埋めの人です。

・右の子がピアノの下敷きになったんです。中三のときにピアノの下敷きに、真ん中はお母さんです。

・こっちの人は六十時間生き埋めになった人です。

こんな感じでダイジェスト版が始まっていきます。震災前の生活を切り取って、震災のときどうだったか、そして今どうなんということをぼんと載せてるだけなんですけども、ほかの人に比べ、ずっと訴える力があつたというところで言われています。ぜひまた見ていただけたらと思います。そして、本の中に差し込むのが十人の証言です。六時間ですから、結構長い。一人二十分とか、長い人は四、五十分あるんです。震災前の生活とか、震災のときどうなったか、そしてその後どう生きてきたのか、ということが入ってるんです。

僕がいつも学生に話すときに、震災とか災害で亡くなった人はたくさんいるわけですけども、何名亡くなったというふうな言葉は使わないんです。そうではなくて、六四〇〇名が亡くなりましたけれども、六四〇〇名のそれぞれの人生が奪われたんやと言っています。子どもたちも大人も、その人生が奪われたんです。亡くなった人たちの数ではない。例えば、広島のときの土砂災

害の場合やったら、数はこんなに多くないですよ。でもその人たちの人生が奪われたんです。だから、とりわけ学生たちには、亡くなった人の数ではなく、何人の人生が奪われたのか、「人」のことを思い描くべきなんだということを話しています。

まず、「訪問活動」のことです。僕は長田の近くの学校に行ってみました、家は三宮を越えて東側の御影っていうところなんです。家はあと二秒揺れてたら、僕は死んでます。もうメキメキっていつて、死ぬと思ったときに揺れがとまったんです。木造の家がぼんと戻ったんですよ。もちろんはぐちやぐちやですけども、命は助かった。そんな状況で、その日は学校には行けなかったです。明くる日に、学校に行つて、生徒の安否確認をしました。学校が避難所になつてるので、生徒たちの居場所がないんです。それで、この子たちが一日何時間でもいいからおれるようにということ、教員みんな探して、二時間、三時間おれる場所を確保したんです。確保した後で、今度は僕自身の問題ですけども、三宮を越えて、避難所である学校に行くことはなかなかできなかつたです。もちろんバスも電車も何も通つてませんし、自転車で行くしかなかつたです。歩いて行くと二時間かかります。自転車で行つたら、ガラスの破片があちこちに落ちてて、すぐパンクするので、九日目に、校長に近所の避難所でボランティア活動していいかなと話をしました。そうすると、二週間をめで構わないということ、学校はその間休んでボランティアに専念にするというので行つたんです。僕は避難所に行つたんですけれども、何をしてもなかつたんです。要するに、この活動をしようと思つて行つたのではないんです。どんな活動したら

いかなということ、わからなくて行つとるんです。行つたときに、もう九日目ですから、全国から集結した若い子どもたちがいっぱい来てたんです。そのボランティアリーダーが、京都から来てた二十歳の女の子でした。その子が「先生やから、人の話を聞けるでしょ」って言ったんです。何でかなと話をしたら、理科室で毛布にくるまって、じっとしてるおばあちゃんがいる。おっちゃんがいる。「その人たちの話を、私たちはよう聞きません」って言ったんです。「先生やから聞いてくださいよ」っていうのがきつかけなんです。できるかなっていうことで話をしました。ただ、その人たちと昔からつき合いがあった人じゃないので、そんなに簡単には心を許すことはできないです。だからそのきつかけとしたのは、新聞をつくることでした。九日目のときは、長机のところに各社新聞が置かれ、勝手に持って行って読んでくださいというスタンスなんです。ですけど、被災した人、家をなくしたり、それから子どもを亡くしたり、仕事をなくした人にとつてみたら、新聞を一から読むっていうのはとてもできなかったことです。それで僕らがつくったんです。現金の受け取り方とか、身近な情報です。今、風邪がはやっているので紅茶でうがいしましょうとか、B四サイズの新聞を毎日つくりました。途中までは新聞記事を張りつけて配るわけです。よろず新聞というのをつくって、各部屋に持って行くんです。持って行くときに、例えば皆さんが被災してる人だとしたら、ざっと配るんじゃないくて、教室の真ん中に集まってもらうんです。そして、配って説明をするんです。今日はこういうことが載ってますっていうことで説明します。説明したら、今度は質問が返ってきます。質問に答えられたらいいんですけども、

答えられなかったら明日答えるというふうにします。そういうことを繰り返して、避難所解消まで、九月九日が最後の新聞やったんです。もちろん人はほとんど減っていくわけです。最初四百名からほとんど減って行って、最後の新聞は、十五名の人たちに毎日配りました。この行為が恐らく僕は、人と人との距離を縮めることになったのではないかなと思います。ただ配るだけであれば、なかなかその距離は縮まらなくて、話もできないというふうになったんじゃないかなと思います。

避難所が解消されて、それから仮設住宅に移ったときに、一旦、僕は活動をやめたんです。当初、避難所が解消され、全員が出るまで活動しようと、みんなで約束したんです。メンバーは最初五名だったんです。PTAの人、それから僕のような人、カウンセラーの人、そういうことで五名やったんです。それでやり始めて、途中から大学生とか高校生と一緒に活動し、いろいろ盛り上がったんです。けども九月十日で全部終わりました。その後、仮設住宅にみんな移られました。

避難所のトイレは共同で、お風呂もない。そういう不便なところから仮設住宅に行ったら、同じ家族に一つの部屋をあてがうことができる。風呂もある。トイレもある。だから僕は、幸せな生活を送ってはるんやろうなと思います。ところが、毎日のように孤独死、自殺の報道が後を絶たなかったんです。実際見に行ったら、酒の空き瓶が転がってる中で寝たきりのおっちゃんが、「もう仕事ないねん」言うて、やけくそになってる人もいます。避難所から仮設住宅に移

るときは抽選やったもんで、隣は知らん人なんです。地域の人同士が一緒に移れば知ってる人同士ですので話もできる。だけど全く知らない人が隣の部屋に来て。仮設住宅っていうのはベニヤ一枚なので、隣の物音が聞こえる。けんかする声も聞こえる。テレビの音も聞こえる。食事のにおいもする。だから本当に、ひとり暮らしの人は孤独やったんです。仮設住宅にずっと通ったんです。あるとき、一日三人に七時間話を聞いたことがあるんです。これはもう大変だったんです。まだそのときは四十代だったんで、行けたかなと思うんですけども、今やったら倒れてます。三人と七時間話をする。この当時はまだまだ何々を失ったりとか、これからどうしようとかいう、前向きな話じゃなくて、どっちかといったら後ろ向きな話が多かったです。僕は自転車で家から通ってたんですけども、七時間話を聞いたもんで、しんどくて帰りに自転車に乗れなかったです。もうエネルギーを吸い取られて、自転車を押して帰ったのを覚えてます。でもその明くる日、また行っているんです。多分若かったんやろうなと思います。今やったら一週間ぐらい寝込んでしまつて、もうしんどいわというふうになつてるかもしれません。こういう訪問活動を繰り返し返していきました。

「訪問活動の意味はどこにあるんや」とよう言われます。東日本に行ったときも、「牧さん、訪問活動、訪問活動って、人の話を聞くいうけどね、どんな意味があるの」と言うんです。ここです。あんたひとりではないよと。置き去りにされてないということを伝えるためやと思います。それは後々ずつとやっていく中で、そうなんだと僕は気づいていくわけです。最初からそう

思ったわけじゃなくて、やっていく中で、ひとり暮らしの人にとつてみたら、ひとりではない、訪ねて来る人がいるということがとてもうれしいことなんです。訪ねて来てくれるということは、ひとりではない、私は置き去りにされていないということを感じ取ることだと思っんです。だからそういう意味があるんやということを話しました。このことを二十五年ずっとやってきました。

そして、復興住宅に入居されるときに、一三〇世帯一四〇人、震災から二年、三年目ぐらいからですけども、ずっとかかわっていて、今十二名しかいません。ほとんどの人が亡くなったり、高齢者の人ですから、施設に入居しました。もうしんどかったです。それが僕自身、活動をやめようとするきっかけやったんです。僕もどんだん年をとっていきます。当事者の人も年をとっていきます。亡くなっていく人がどんだん、どんだん出てくるわけです。「今度来るわな」って「楽しみにしてるよ」と言われて、次行ったとき、玄関にお葬式の紙が張ってあって、それでお葬式にも行ったこともあったんです。もうそれはショックで、だんだん自分の何かがすり減っていくような気がしました。それでも頑張ろうと思って、頑張り切れたのは何かなくなって思ったら、さっき映像にもちよこつとありましたけどもカンパだったんです。それこそ大阪のおばあさんからだったり、たくさんの方から多額のカンパをいただきました。

震災から一年目のときに、かつての被災者、かつてのボランティアが集まったときがあるんです。そのときに僕は、仮設住宅の大変さを伝えたくてです。皆さんが集まってくるときに、もう一回よろず相談室を再開したいと話をしたんです。そうしたら、僕も手伝う、私も手伝うって、かつ

てのポランティア、かつての被災者が手を上げてくれたんです。計十三名で、東灘区って小さいエリアですけども、その十か所の仮設住宅を訪問しました。元気な人じゃなくて、高齢者とかひとり暮らしの人とか病弱な人とか、そういう人たちをピクアップしながら訪問しました。そういう活動をしたんです。

それでも、また仮設住宅から復興住宅に移るときは全員抽選なので、復興住宅に移った瞬間にまた隣が知らない人状態になるんです。復興住宅は仮設と違って、これからは皆さんも気をつけなあかんと思いますが、仮設住宅というのは隣の物音が聞こえるんですよ。御飯をつくってるにおいもおう。におうということは、人間の声が聞こえる。人間らしいなと思うことです。隣がけんかしてる声も聞こえるわけです。復興住宅は聞こえません。マンションにぼつんとひとりです。入ったら本当に静かなんです。もうずっと朝から晩まで静かです。一人の高齢者が入居しました。荷物もちよこつとしかあらへんのです。八帖ぐらいの部屋の一DKですね。一人やったら一DKのマンションですけども、部屋に荷物はほとんどないんですよ。ちゃぶ台とテレビと電話があるだけだったんです。押し入れに服とか布団を入れたら、もうそれでしまいなんです。だから何も無い。この孤独っていうのは何やろうって思いました。隣の人と仲がいいかと思ったらそうじゃなくて、全く知らない人が、上も下も横も住んでるわけです。だから関係が本当に築けなかったです。それがやっぱり、復興住宅の中での一番の問題だろうなと思っっています。

東日本も大変です。東日本は阪神よりも早く高齢化が進んでいます。そして若い人たちは働く

場所を求めて、仙台とか東京に行ってます。だから東日本の場合、神戸と違って、高齢者ばかりが復興住宅に住んでるんです。これが寂しいです。だから今後、どんなに孤独死とか自殺というのは、東日本で増えてくると思います。それはなぜかというと、神戸の場合は、若い人がどこかへ行ってしまふ必要がなかったんです。交通網ができたのが大体半年後なんです。神戸から三十分ぐらいで、大阪に働きに通うことができるわけです。そして戻ることができるわけです。だからその復興住宅に家族で、じいちゃんばあちゃんも一緒に住むことができたんです。これは大きかったです。それでも大変な状況だったんですけども、東日本はもっと大変です。若い人がいないんだから。そういう状況に置かれているのが東日本やと思ってください。

今度また南海トラフ地震と言われていますけども、多くの家がつぶれたり亡くなる人が出ると思います。そのときに、やはり最終的にマンションなんです。マンションという復興住宅はできません。間違いないと思います。そうすると、それは本当に人が住むような場所なのかということを考えていかないと困るんじゃないかなと思います。話し相手になることが、僕がずっと活動してきたことです。話し相手とは、ひとりではない、置き去りにされていないということ伝えるためです。

それと同じ効果が「手紙支援」なんです。震災後の生活では、大体自分宛ての手紙は、ほとんどないんです。特にひとり暮らしの人たちにはないんです。あるのは請求書だけ。電気代、ガス代、水道代ね。そこに、知らない人から自分宛ての手紙が来たらどうでしょうか。とてもうれし

いと思います。それが手紙支援だったんです。手紙支援は、茨城県の歯医者さんが始めてくれました。東日本大震災で、この人は被害に遭ったんですけども、十九年前からずっと続けてくれました。手紙の持つ意味はどんなにかというのと、例えば僕が訪問してるおっちゃんがおったんです。何遍言うてもパジャマ姿で頭ボサボサ、「何とかしいな」って言うて話します。せいへんのですわ。「もうほんま知らんで」って言うて話してた。そこへ香川県の高校生からひよいっと手紙が届くわけです。かわいらしい封筒で、中に手紙が入ってて、写真張りつけとるんですよ。それから変わったんです。その人は、髪を七三に分けて、ブレザー姿になりました。何でそんな変わったんというぐらい変わったんです。自分に役割ができたんです。それまで、「俺はもうどうでもええねん」ってよう言うてました。だけど高校生からの手紙が来て、返事を書く。これで文通が始まったんです。そのことで高校生は悩みを神戸のおじいちゃんに打ち明けるわけです。例えばお母さんに言えないこと、進路の問題とか、彼氏のこととか、言うわけです。ほんなら神戸のじいさんよりいうて返事を書くわけです。これが生きがいです。俺には何もないんやと思ってたんが、あったんです。それからころっと変わりました。こうやってブレザーになりました。琴平高校から年に二回、神戸に来るんです。そのおっちゃんは、もう必ず出席して、そのときは髪を七三に分けて、ブレザーを着て、高校生に「こうせなあかん、ああせなあかん」って、偉そうに言うてますけども、これが生きがいです。そういうことが手紙支援ではたくさん起ります。

例えば東日本大震災の場合は、支援に行けないんだという人たちから、三百件ぐらい連絡がありました。ほとんどが高齢の方です。東北に行くのにお金がなかったり、時間がない。時間はあっても体がついてけえへん。心配やけどもお金がないし、体も弱いんやと。どうしたらええんやろうかと、よろず相談室に連絡がありました。NHKで「明日へ」という番組があるんですけど、それで特集されたときに、手紙支援のことを話してたんです。それを見た人たち、全国に三百人ぐらいの人たちが連絡をくれて、私たちは手紙だったらできるということで、手紙支援をずっと今も続いています。今年もクリスマスカードを書いて、十二月の初旬に送る。東北と熊本と広島に送ることになっています。手づくりのクリスマスカードはともうれい。そういう手紙支援、これはやっぱり僕は「人」やと思つてます。だから、ただ単に手紙じゃなくて、カードでもなくて、その人に会いに来るみたいな、会いに行けなかつたら手紙ついでというのが、支援のあり方の一つではないかなと僕は思っています。

それから、この識字教室っていうのは、読み書き教室のことです。震災が起こる前までは地域の人たちが、読み書き、そろばんができない人をいろいろと助けてくれました。例えば、病院に行くと、必ず問診票を書かなあかんし、それから区役所行ったら、いろいろ漢字があふれますよね。何もできないんです。もし読み書き、そろばんができれば、どうされますか。右手に包帯巻いていくんです。ほんで書かれへん言うて……。書かない方法を考えるんです。そういう人たちが、いっぱいいるんだということがわかつたんです。それは地域で助け合えてた人が、

避難所では一緒だったんですけども、仮設住宅ではばらばらになりました。そのために、その人たちが仮設で孤立したんです。隣の人に、私は字が書かれへんねん、読まれへんねんって、恥ずかしくて言えない。だからじっと孤立していることがわかったんです。それで、市内三か所、よろず相談室「大空」と三宮の横の二宮にある「賀川記念館」と、それから今も長田で頑張っている「ひまわり」っていう、三か所の読み書き教室ができました。これは仮設で孤立している人がいっぱいいることがわかってつくったんです。「大空」は生徒数も先生も減って、去年の十一月に閉店しました。一対一で、本当に居場所やったんですけども、二人とも病気になるって入院しました。だから、元気になったら、もう一遍やろうという形で、一時閉店しています。

それから、震災障害者の話です。これは、僕はよく書くんですが、ここが発災当時なんです。そのとき、当事者は若いですね。それから支援者もたくさん来ます。このときは、まだましなんですよ。元気でいるんですよ、みんな。頑張ろうかいって、元気でいる。でもね、ずっと逆になっけていきます。僕は「ハサミの原理」って呼んでるんですけども、支援者はどんどん、どんどん減っていきます。復興住宅ができたらゼロになります。復興住宅ができたら、被災状況がわからないからです。でもそのときに年取っています。どんどん、どんどん年取っていくわけです。だから、今、神戸が被災して二十五年を迎えましたけども、当事者が必要とされている支援、それは話し相手です。むちゃくちゃ寂しいですから、話し相手、訪ねてくれる人がほとんどいませぬ。あるとすれば、もうこれも行政がなくなると言っていましたけども、生きてるか死んでるかのか

安否確認です。これは当事者にとってみたら、必要としないんです。生きているか死んでいるかだけの安否確認じゃなくて、「僕の話をちょっと聞いてえな」ということなんです。「お茶飲んでえな、五分でいいから、お茶飲んでしゃべってえな」ということが必要とされています。でもそれがないんです。これは行政の限界。行政を責めることはできない。それはなぜかというと、行政は平等論なんです。Aさんとここで家が上がってお茶飲んだ。Bさんとここで上がらへんかったと。これはあかんわけです。だから行政は平等論なんです。それを突破できるのはボランティアしかいません。だからボランティアと行政が足らずの部分を補い合う関係になれば、これはできるのではないかなと思っています。行政はできひんけど、そういうお金は出すよと。交通費は出すよと。ボランティアもそうやってやると、その人は、訪ねていった人がどういう状況にいるのかということを行政に知らせるといって、そういう関係になればいいんですけども、残念ながら阪神大震災の場合はありませんでした。というのは、訪問活動は活動ではない。むしろイベントとか、形のあるものに活動の主軸を置いたんです。だからなかなかそれができなかった。認められなかった。

東北は今、もう一〇年目になりますけれども、もう完全に一番端の関係です。支援者がいない。三・一一のときだけ来てただめなんです。三・一一以外の三六四日の支援が本当は必要なんです。

これは、先ほどの映像で見たものです。神戸のマンションで、一階がぐしゃつとつぶれて、一

階に駐車場のスペースがあつたんがドンと落ちて、二階が一階になるんです。東北でも一階は駐車場になって、二階から住むようになってる建築士の家がありました。津波を通すためらしい。津波をざっと流すはけ口。だから、僕が石巻に行ったときに、一軒だけきれいに残ってる家があつたんです。それは一階がこういう駐車場のスペースやつたんです。二階、三階に住んでたんです。一階にざっと津波が流れたんです。ほかの家は一階に住んでますから、そこは全滅です。でもその家だけは何ともなかった。家主は、昔からの言い伝えやと言われてました。その家の親から、津波のはけ口をつくっておくようにと言われてるって。阪神大震災の場合は、激しく揺れる激震ですから、一気にゴンとつぶれてたんです。だから一階が駐車場になるところは全部つぶれました。家も、こうやってぐしゃぐしゃになりました。やはり避難所解消の後も行く場所がないから、テント生活されている人もいました。

就職差別のことをちよつと話します。就職差別はあつたんですよ。被災者であることでの就職差別。考えられない。自分の家を失つて、働く場所も失つて、その人や子どもが就職差別にあうんです。このAさん、僕の避難所のところをいた子でしたけども、短大を卒業したときに、六月に試験があつたんです。それで試験を受けた。通つたんですね。あの当時は一次が通つたということ、二次も通るといふ学校と企業との関係やったそうです。だから通つた言うて喜んで帰ってきたんです。そして避難所のおっちゃん、おばちゃんにお礼を言うたんです。避難所の中は、その子が勉強してる間はテレビの音を消してね、みんながその子を応援してたんです。とこ

ろが、明るる日に、企業から「Aさんは避難所にいるのですか」という電話が学校にあったんです。もちろん学校は、「そうなんです、大変なんですよ」って言いますよね。被災してて大変なんだから。そうすると、「そうですね、Aさんの話はなかったことにしてください」。内定取り消しになった。

Bさん、この子は三十分の面接時間がありました。企業との面接っていうのは、企業がこの子を採用したら、うちの会社に有益なのかとか、学生にとってみたら、この企業に私は行きたいのかと、そういうことを確かめる一番大切な時間なんです。しかし、あなたの書いている住所は被災地なのかと。家を建て直すことはできるんかと。これを三十分にあわせて聞かれたと。聞かれたんで、頭にきて、私は知りませんと。お父さん、お母さんが決めることですよって言って、不採用になるんです。

このCさん、この人はマンションを再建しなきゃならない。夫も働いてるけど、自分も働かないと、とつてもやっていけない。避難所にいるっていうことを伝えたら、全部不採用。これは人事担当者の言葉です。「避難所に通ってる人、そんな人を採用できない」。こういう認識が企業側にあるんかなと思いました。その人がパートでね、スーパーの採用試験に通るわけです。でも、通ったときは、被災してない友達の住所にしたんです。ほんで通ったんです。だから被災しているところの住所で応募したら全部不合格やった。これ何ですかね。みんな壊れてるのにね、不採用にしていく。要するに保障がないからなんです。その人が何かをしでかしたときの保

障はないというので、不採用にしていっただんですね。残念ながら、上の企業も真ん中の企業も大阪です。大阪の企業なんですけども、不採用にしていっただんです。

家庭崩壊。これは若い人たちの問題です。一年後に、兵庫県が自助努力による生活再建という言葉をごんごん打ち出したんです。自分の力と努力で生活再建してよということなんです。それに応えたのが若い世代なんです。「地震に負けたらあかん」と。ところが僕の知ってる三世帯全部が家庭崩壊しました。なぜかという、家がつぶれたので仮設生活に入った。しばらくしてから、土地だけが残ってるけれども、自助努力による生活再建、甘えたらあかんと。頑張らなあかんねんとなって、家を建てかえたんです。建てかえて、子ども三人に部屋をあてがうことができるような家になったんです。ほくも行きましたけども、「家を建てかえて良かったな」と言っていたんです。ところが、ここの家は、住宅ローンを背負ったわけです。背負ったために返さなあかん。返すために、もつと働かなあかんってなって、お父さんはもちろん働いてる。お母さんは今まで家にいてたんですが、毎日大阪まで働きに出ることになったんです。子どもたち三人にとつてみたら、今までずっと家にいてくれてたお母さんがいなくなりました。晩まで帰って来ない。このことでどうなったかという、中一の長男はたばこを吸う。もちろん学校から親呼び出しです。親が仕事放っぽり出して帰ってくる。子どもにとつたら、お母さんと話ができるわという喜びなんです。お母さんは逆なんです。この子ほんまにもう、私忙しいのに何してるねんと、こうなるわけです。長女はセーラー服姿で、雨の中で死んだふりするんです。構ってほしいんです。子ども

もたちは構ってほしいからいろんなことをしてかします。腹立つのが親。結局、夫婦の間で対立が起こるんです。「おまえのしつけが悪かったからや」ってなるわけです。そのことでもめるわけです。どんどんもめていって、夫婦間が離れていく。そして子どもたちもばらばらになっていくという家庭崩壊。家庭崩壊というのはたくさんあると思います。僕知ってる若い世代、全員家庭崩壊でした。頑張り過ぎたからです。僕は頑張ったらあかんど言うてるんです。頑張り過ぎで家庭崩壊するよと話をしています。

生活保護打ち切りっていうのは、お金がなければ生活保護を受けることはできるわけですけども、阪神大震災のときは、生活保護世帯は減ったんです。変でしょ。全壊が十八万六千世帯、家が全部なくなってしまった。当然生活保護で生活しなければいけない人が増えなあかんわけです。でも減ったんです。一千世帯も。なぜか。行政にも言い分はあるわけです。そういう人たちは全部亡くなったというわけです。だから減ったんだと。僕は違う、そんなことないやろうと。なんでやという話をするわけです。理由は、避難所だったら住所不定となって、生活保護をとれないんです。「それじゃあ、今までの土地とかでいいんですね。テント張ったらいいねんな。住所が定まるから」って言うたら職員は黙りました。だから、そうやって住所が決まれば生活保護はおりるんです。定まらなかつたらおりない。これが今の生活保護法ですね。

これはDVDで見えていただと思いますけども、先ほど一番最初に出た柴田さんっていう人ですけども、子どもが二人亡くなりました。国からの支援で災害弔慰金というのがあって

す。世帯主が亡くなったら五百万円です。それ以外は二五〇万円。半額なんです。これも変ですよ。世帯主が亡くなったら五百万円だけでも、それ以外はお母さんが亡くなっても二五〇万円、子どもが亡くなっても二五〇万円、半額なんです。だけど二人やから、五百万円もらいました。あのとき、義援金が十万円やったんです。それでやっていったんですね。この奥さんは家の下敷きで重度の障害者となったわけです。リハビリに連れて行かなあかん。でも二〇〇万円だけお墓代に残したいと思ったんです。残高二〇〇万円になったときに、福祉事務所に行っただけです。うしたら「全部使ってから来い」と言われた。「残高ゼロになったら生活保護費を渡す」と言われたんです。リハビリのために、奥さんを毎日病院に連れて行ってた夫は、悪いけど自分で病院に行ってくれと。そして自分は働くと。この二〇〇万円には手をつけられへん。子どものお墓代だからです。こういう人もいました。

これ、二階建てです。最悪の仮設です。昔でいうたら学生寮ということですよ。真ん中に廊下があつて、共同トイレ、共同炊事場、共同風呂、六帖一間か、四帖半一間。ここに障害者か高齢者だけを入れたんです。若い人を入れなかつたんです。神戸市と、えらいけんかになったんですけれども、これは国の指示ですよ。なぜかという、避難所で亡くなる人が増えたんです。一月やつたから、寒かつたから、風邪とか増えたんですね。いわゆる社会的弱者といわれている人たちに、はよ居場所をつくれというので、こういうのができた。一階と二階に別な人が住んでるんですよ。六帖一間で二人で入居です。殺生な話です。台所もあるときはガスでしたから、もし火事に

なつたら、こんな仮設なんか一〇分で丸焼けです。偶然ですけども、どこも火が出なかったです。こういう仮設があつたということです。仮設住宅の入居要件は、第一順位から第四順位までありました。第一いうたら高齢者だけの世帯。それから障害者のいる世帯。障害者も身体障害者一級、二級の結構重度の人です。それから療育手帳、知的障害のAランクという重度障害ということです。だからそういう人がいる世帯とか、母子家庭、子どもが十八歳未満の世帯です。こういう区割りをして、第一順位の人をざっと入れていったんです。復興住宅にもこういう順位をつけて入れたんです。仮設ももちろんそうやったし、復興住宅もそうやったし、だから復興住宅の中には第一順位の人とか、第二順位の人がめちやくちや多かったです。若い人がいなかったというのはこのせいです。

震災障害者の問題はぜひお話しさせてください。震災障害者の意味は二つあります。一つは「障害者が震災に遭う」ということ。もう一つは「震災で障害者になる」ということです。どちらも大変です。僕のほうは、震災で障害者となった人たちを支援しています。そのときまでは、孤独死を防ごうとか、自殺を防ごうという考えばかりやった。でも震災で障害者になった人、片足を切断した人たちは生きてるけどもつらい生活を一生余儀なくされる。そういうふうな人たちの苦しみを全然わからなかったです。震災から十一年目で初めてわかった。

偶然、その前の勤務校の横に喫茶店があつて、そのマスターにばたつと会つたんです。そのマスターはここのお尻の筋肉をとったり、クラッシュ症候群とって、十八時間同じところに閉

じ込められたもんで、血液が回らへんとか、そういう状況になつて障害者となりました。その人と会ったときに、初めてわかつたんです。その人が言った言葉です。それは、「私は重たい荷物を背負っています。この荷物を薄紙をはぐように軽くしていきたい。そういう場が欲しい」あのときは頭をゴンと殴られるような思いをした。僕は、その人の苦しみを十一年経つまでわからなかつたのです。

十二年目の三月から支援活動を始めました。この人たちのことは、ほとんどの人が知らないです。東日本もたくさんいますし、熊本やったら、東海大学の学生が片足切断了んです。会いましたけど、彼は福岡から阿蘇にある東海大学の農学部寮に入り、一週間で震災に遭つたんです。それまでは牛を追いかけてたりできる唯一の学部やつたそうです。だからあこがれて行つたんです。行つて、一週間で寮がつぶれて、自分は片足切断了。

それ以降、牛を追いかけられなくなつたんです。二十歳ですよ。今は頑張つて、筑波のほうで働いてますが、でもあのときの夢はもう打ち砕かれて、できなくなりました。こうやって生活をずっと支援していかなあかんわけです。彼は二十代から死ぬまで、そうして生活していかなあかん。そして人からの目線。夏暑かつたので、義足をはめて半パンで電車乗つたそうです。すると、人の目が自分の体に突き刺さるような視線やつたというんです。あれからもう一切、半パンははかない。暑くても長いズボンをはくというふうに変えたそうです。そのように、障害者に対する無理解とか、それに一々、ずつつき合つていかなあかんというのが震災障害者です。

障害者そのものもそうですけども、震災で障害者になった人は、それまでは元気やったんですね。さっきピアノの下敷きになった女の子が話して話しました。あの子元気やった。バレエボールが大好きで、だけど一瞬にしてピアノの下敷きになって、行動がおかしくなる。写真があるかもしれない。この子です。でも、医者にあたると十二時間の命です、覚悟しといてくれと言われたんです。でも、もとに戻ってきてくれた。リハビリしながら街を歩き始めた。でも奇妙な行動をとる。例えば、隣の人の髪の毛つかんだり、突然走り出したり。今までなかった行動を取り始めたんです。障害手帳をみんな持ってます。この子は身体、知的、精神、みんな持つてるんですが、わからない。この病状がわかったのは六年目だそうです。高次脳機能障害。車の事故でドーンと頭が当たったときに、大体三人に一人ぐらいは高次脳機能障害になるらしいんですが、要するに脳が全体的にぼやんとやられるんです。そういうふうな障害。この子は働こうとして、僕もいろいろなところに、例えばスターバックスコーヒーとかUCCコーヒーとか、そういうところに実習に行かせたんですけど、あと一歩のところまで無理でした。今は作業所で働いています。月五千円ぐらいの収入はあるかなという感じです。出費のほうが多いですね。今はお母さんのほうがだんだん体がしんどくなってしまっ、お母さんが子どもを支えてたのが、今度は子どもがお母さんを支えるという状況になっています。

その震災で障害者となった人に調査したんですけども、自殺を考えた人は四割、生きがいを持ったのは七割。公的支援というのはさっきの弔慰金、亡くなった人の半額です。世帯主が亡くな

つたら五百万円。世帯主が一級障害になったら二五〇万円です。一級障害っていうのは両手切断とか両足切断しないと一級じゃないんです。片足切断とか片腕切断、これは一円ももらえせん。これが今の国の制度です。両足、両手切断とか、両目失明とか、そういう人が災害障害見舞金二五〇万円を一回だけもらえます。阪神は六十四人です。東北は九十数名います。

これは医者診断書なんですけども、ここに自然災害という項目はないですよ。要するに、医者が診て、この人がどういう理由で障害者となったのかということなんです。理由欄なんです。ここにはないので、「その他」のところに「震災」と書くしかなかったんです。実態調査が震災から十五年目に行われました。兵庫県と神戸市。三十二万人の人が障害者手帳を持ってることがわかったので、医者の診断書の「その他」のところだけを見たんです。「震災」と書かれていますか。この下の「一月十七日」と書かれてるかを見て、初めてこの人は震災で障害者となったんだということも認定したんです。そうすると、めちゃくちゃ少なく、三二八名やったんです。重傷者が一万人超えてるんです。重傷者っていうのは一か月以上入院です。一か月以上入院っていうたら結構なんです。そのうちの四分の一、五分の一の人が後遺症を持ったっておかしくないです。けども多くの人は認定されなかった。三二八名、県の報告書もありますけど、これはネットで調べたらすぐわかります。「震災障害者の実態調査」「兵庫県・神戸市」と打てば出てきます。兵庫県も、少なくとも三二八名やというふうに書いてます。本当は二千名を超えると思ってます。これも職員に話したんですけども、「そうでしょうね」と。だけど、実際にはつき

り確定はできないので、だから三二八人だと言ってますけども、実際はもっと多い。さっきの理由欄に自然災害を入れることについて、二〇一七年に厚労省に行き、副大臣に会いました。一か月後の三月三十一日に、国が全国の自治体に入れるよう通知しました。最後まで抵抗してたのは東京ですけども、東京も入りました。だからその理由欄のところに自然災害って入ってます。ですから、この人はなぜ障害者となつたのか。災害でなつたら丸をしたら、この人はそうなんだということがあるようになりました。

あと大事なのは、集いの場なんです。同じ悩みを持つ人が集まる場なんです。これは、本当に大事なことです。別に震災障害者だけじゃない。例えば、親が認知症で、子どもが支えているという人、たくさんいます。厳しいです。子どもにとっても厳しいです。そのときに、やはり親殺しってあります。よく起きるじゃないですか。このときに子どもがひとりで頑張ってるからしんどいんです。でも同じように、認知症の親を支える子どもたちの集いがあれば、どれだけこの子どもたちが癒やされるかわかりません。これは実際に少しずつでき始めたみたいですけども、ただ単にお茶飲むだけです。でも同じ境遇でしょ。親が認知症で支えてるんやと、しんどいんやという境遇は同じなんです。お茶飲んで、俺のところこんなやねん、私のところこんなやねん言うて話をするわけです。こうしたらええん違うかとか、ああしたらええん違うかとかというところが、俺はひとりではないんですよ。私はひとりではないんです。ということが集いの場でわかって、それで一か月間もつんです。また頑張ろう。親も面倒みようってなるわけです。それで

また一か月後に話をする。そういう集いの場というのがとても必要なんです。だから震災障害者も同じで、孤立無援ということを考えていたんです。そうじゃなくて、ひとりではないんだということがとても大事なことじゃないかなと思います。集いつていうのができたら本当にいいなと思つてます。これは震災障害者だけに限ったことじゃなくて。

これは、厚労省に行つたときです。これはピアノの下敷きになつた子ですね。この横の人は震災の前は元気なおばちゃん、バレエボールも大好きな人やつたんですけども、今はもう歩けない。下半身不随になつて車椅子です。だんだん悪化していつて、もう毎日痛い。一番端の人が、五十センチ立方の空間に十八時間生き埋めになつた方です。その上の右から二人目の子が、二か月のときにベビーベッドに寝てて、一番重いたんすが倒れてきたんです。頭を打つて、頭蓋骨骨折して、大阪の病院で命をかけて手術したそうです。助かつた。だけど、一番重たい知的障害と、左手が身体障害になりました。もうすぐ二十六歳になります。それで、この子の不安は何かというのと、私は一人でやっついていけるかなと、今言っているそうです。これからの人生ですからね、私は一人でやっついていけるのかなと、お母さんもお父さんも死んでしまつたらどうするのというふうな感じ。お父さん、お母さんは若いですから、やはり、子ども一人だけがそうなのが一番しんどいつて言つてました。一家が震災に遭うということは全員がそうなるんじゃない、そのうちの何人かが、一人だけがそうなるのか、あと全員無事やとか、そういうことで、一家がずっとそれを背負つていけないといけないというのが、一番しんどいことだと思つています。

最後ですけれども、心のケアという話によくあるんですけど、僕、専門家でも何でもありませんけども、心のケアにおいて、専門家の登場は最後でいいと思ってます。専門家に聞いてもそうやと言っていました。心のケアって、ほとんどが誰でもできるものやと。僕もそう思います。

二つ例を話します。一つは、第二人が亡くなった長男がいたんですけども、その子は小学校のときに、黒い太陽を描いたんです。それで先生がびっくりして、カウンセラーに見てもらいなさいと話をするわけですが、「僕はおかしくない」と言って、不登校になったんです。でもそのあと、この子は学校に行けるようになったんです。これは学校の教師の力じゃないんです。このとき仮設住宅に来てた大学生のおにいちゃん、おねえちゃんとドッジボールしたり、鬼ごっこしたりして遊んだんです。いっぱい遊んだんです。遊ぶことによって、この子は立ち直ったんです。人間って、そういう力つていうのが必ずあると思います。立ち直る力、あるんだと思います。

もう一人は、お父さん、お母さんが亡くなつて、二人姉妹で残されたんです。お姉さんは母方へ、妹は父方へ引き裂かれて育つんです。この子がいつも言っていたんですが、早くお母ちゃんのところ行きたい、お母ちゃんのところ行きたい、死にたい、死にたいと言っていた。でも死ななかつた。大学を出た。結婚した。子どもも生まれました。今働いてる。なぜそうなったん。なぜあのとき死ねへんかつたんと聞いたんです。そうしたら、あのときに私は楽しい思い出をいっぱい持つことできたって言う。どんなんって聞いたら、キャンプファイヤーとか、海に行くとか、そういうことやと。だから特別なことじゃなくて、本当に楽しい思い出をいっぱい持つってということ

が、本当に子どもたち、大人もそうですけども、倒れてる人たちがぐいっと起き上がる力を持つるエネルギーになるんやなということをつくづく感じました。だから心のケアといって、最初から専門家じゃなくて、悲しみを乗り越える力は、我々のように普通の人から与えられると思っています。それでもだめなら、専門家の登場やと思っています。

それと、もしもこの中に訪問活動をされてる方がおられたら、特にこういうことに気をつけていただきたいなと思ってます。「何をするのでもなく、何となくずっとそばにいる」。これが訪問活動のあり方だと僕は思っています。一週間に一度行かなあかんと。こんなこと言うたらあかん、これしたらあかん、あれしたらあかんじゃなくて、隣近所の人に会いに行くんだというふうな気持ちで行って、そして会って、お茶でもよばれたらいいじゃないですか。長い時間じゃなくたっていいんです。十分でも二十分でも話をして、また来るわ、これでいいと思うんです。それは何をするのでもなく、何となくずっとそうしてるんです。また来るわ、また来てくれるなあという気持ちが支えになっています。だから支援者は肩肘張って気負わない。頑張り過ぎないということだと思います。これはやればやるほど、「頑張り過ぎればするほど、支援者の側が倒れます。これからちょっといろんな話が飛び交ってくれたらうれしい。僕も答えられるところは答えますし、答えられへんところはちょっとわかりませんと言いかもしれませんが、ぜひ、何でもいいですから質問していただけたらと思います。以上です。

○司会 牧さん、ご講演、ありがとうございます。(拍手)

本日は、もう少しお時間がございますので、皆さんのほうからご質問お聞きしたいと思えます。質問のある方は挙手をお願いいたします。どなたか質問のある方、ございますでしょうか。

○質問者A 今日には本当に貴重なお話をありがとうございます。

先生が三十七、八年の定時制高校の教師を一貫して続けてこられたということ。これはできることではないんじゃないか。そのことが今日、お話しいただいたことに全てつながってるんじゃないかなど。まずその感想を申し上げておきたいと思えます。

私は、あのニュースをラジオで聞いて、すぐやっぱり両親のことが頭に浮かびまして、当時は、まさか神戸であんなことになってるとは思わなかったもので、とりあえず、車で両親の安否確認に出かけました。通常は枚方から現地まで、一時間あったら十分往復できたんです。それが当日は八時間かかりました。現地に着いたら、家の前に一メートルの裂け目ができてまして、妻の母がそこにはまり込んで大変なことになってました。母を救出しましたが、どこか行ける病院はないようなので、これは大変だと、とりあえず被災地を脱出しようということで、十八時間かかったことがございました。そんなことで、今日の話、私全然知りませんでした。大事なことがまだまだ埋もれてるんやなって思いがしております。ありがとうございます。

○司会 ありがとうございます。それでは、ほかにご質問のある方はございませんでしょうか。

○質問者B 牧先生、ありがとうございます。今おっしゃったとおりで、知らないこともたく

さんあって、一番最初にお話された、「俺負けへんぞ」っていうのも詳しく聞きたいですが、今回は震災の話なんで、私も時々ボランティアみたいなのをしていますけども、家族の支えなしにはできません。家族の方はどんなふうな気持ちでおられたか、何か聞かせていただけることがありますら、聞かせてください。

○牧 秀一 一番シビアなことです。震災から二年、四年目に、僕を追いかけたドキュメンタリー作品があるんです。そのときに妻が勝手に言ってるんです。私はボランティアウイドーやって、テレビで言うてるんです。僕初めてテレビで見つくりしたんです。未亡人や言うてるんですよ。それと、学校への比重は、あの人の百の中で5%ぐらいと違いますかとか言ってるんですよ。想像で物事を言うて、だからほかの教師も、5%かなんて言うてるんですよ。だからもうどっぷりはまり込んでしまって、八十何%はボランティアでやってるんだと言っていました。

東日本にも行くようになって、行ったら三日、四日は行くし、長いときは十日ぐらい行って、向こうの支援者を支援するというふうな、一緒に歩くというふうなこともやっただんですが、そのときは「体に気をつけなあかんで」と言うてましたけど、きつと、皆さんと一緒にと思います。

○司会 ありがとうございます。ほかに何かご質問のある方はおられますでしょうか。

○質問者C 一つお伺いしたいんですが、牧さんがいろいろ避難所を回られるときに、障害者の方とかかわることはなかったですか。例えば聴覚障害者の方たち、視覚障害者の方たち、車椅子に乗ってる方たち、そういった方々が抱える悩みなどを聞かれたことはなかったですか。

○牧 秀一 ないんですよ。僕の生徒が車椅子でお母さんと一緒に車で寝てたんです。その親子も被災者ですね。被災者が集まる避難所ですよ。避難所に行ったら、出て行けと言われた。お母さんは頭下げて、寒いから毛布をもらいに行っただけです。誰に頭下げたんって言ったら、同じ被災者に頭下げとるんです。毛布くださいって。そして明くる日から御飯来るわけですよ。何日かしてからです。それも、朝昼晩と頭下げて、御飯をもらいに行くわけです。一か月後に入院しました。例は、東北でもいっぱいあります。出て行けいふうなこと、それはものすごく問題やと思います。熊本やったら、子どもの声が聞こえるから、よう寝られへんから言うて、車で避難してる人が多かったじゃないですか。親が気使って、車に避難してるんです。だから、みんな支え合うというか、そういう雰囲気は、余り今の日本の中ではないのと違うかなと思います。だから今言われたみたいに、避難所の中で、見かけたかって聞かれたら、僕の生徒がけがに遭って、それは見ましたけども、その避難所で障害者の人たちっていうのは見なかったです。

○質問者C いろいろお話お伺いすると、テレビニュースなどで聞く避難所というイメージと現場は大分違うんだと、ものすごく状況は厳しい。

○牧 秀一 厳しいですね。例えば、神戸の僕が行ってた避難所に子どもがいるわけですよ。子どもは、おばあちゃんのところを二か月ほど行くわけですよ。避難所に帰ってきたら、どうされるか、石投げられるんです。おばあちゃんのところを二か月行つて帰ってくるだけで卑怯者なんです。卑怯者になつて、石投げられて、いじめられるんです。

東日本の場合、寒かったじゃないですか。避難所でやっぱり倒れる人もたくさんいるわけです。でも東北の場合はちょっと真ん中に入れば、温泉がたくさんあるわけです。温泉街の旅館の人たちが温泉につかりに来てくださいと。バスを何十台出します。それで、温泉につかっていると、もうほっこりして帰ってきたらいいわけです。そのときに、この地域の人たちがバスに乗ろうとする人に対して「二度と帰ってくるな」と。ほんまですよ、これ。向こうの新聞記者からどうしますって電話がかかってきましたけど。希望者等を募るから、あかんのであって、順番に行ったらええ。全員行ったらええねんって話ししたんです。実際そうです。おまえだけが楽するんかいって発想です。だからその子どももそうやし、障害のある人たちが、避難所に入るいうことを拒絶することにつながっていく。そういうふうな今の社会です。

○質問者C ものすごくちよつと幻滅するというか、日本社会とかは大丈夫かなっていう。

○牧 秀一 大丈夫じゃないですよ。例えば福祉避難所はあるけど、みんなは目の前の避難所に行きますよね。そのときに避難所からはじき出されて、福祉避難所があるから行きなさいとなる。だから赤ちゃんを抱えてる人たちも避難所へ行きますよね。そしたら、赤ちゃんが泣くからうるさい。みんな疲れてるんやろうけど、だからといって、はじき出す必要はないんですよ。

○司会 ありがとうございます。それでは、これで質問を終わらせていただきます。

それでは、ご講演をいただきました牧秀一さんに、もう一度大きな拍手をお願いします。

(拍手)

それでは、これで本日の講座「生きること」を終了させていただきます。本日はどうもありがとうございました。

